

言語療法だより

今回は当院で成人の失語症の方を対象として行なっている代表的な検査をご紹介します。



失語症とは？

失語症とは、一度獲得された正常な言語機能が、大脳の言語領野(主に左脳)の障害により、ことばを「聞く・話す・読む・書く」すべての言語様式に何らかの能力低下を生じた状態をいいます。同時に計算能力の障害も認められます。

ことばを理解したり、ことばで表現したりするのは脳の言語中枢という部分の働きです。一般的に言語中枢は脳の左側に位置しています。脳卒中や事故などで、この言語中枢が損傷されると、これまで正常に行われていた言語(ことば)の活動に障害が起こります。

ことばを聴いて理解することや、話すこと、文章を読んだり、書いたりすることに支障が起こるのです。このためにコミュニケーションの困難が生じます。



標準失語症検査(SLTA)

聴く・話す・読む・書く・計算の5つの大項目からなり、失語症の臨床において最も多く使用されています。

◆ 対象は？

成人の失語症の方を対象としています。



◆ 目的は？

- ①失語症の有無、失語症の重症度、失語症のタイプを鑑別診断する。
- ②定期的に施行することで、治療効果や自然回復について、経時的な言語能力の変化を把握する。
- ③失語症のリハビリテーション計画を立てる際の情報を得る。

◆ 内容は？

「聴く」・「話す」・「読む」・「書く」・「計算」の5つの大項目、26の下位検査によって構成されています。

それぞれの項目には、言語様式の違う課題が用意されています。たとえば「話す」の項目では、絵を見てその名前を答える呼称課題、動物の名前を思いつく限り言う語列挙の課題、復唱課題、漢字や仮名文字の音読などの課題があります。

<口頭(書字)呈示による物品操作>



<口頭(書字)呈示による絵の選択>



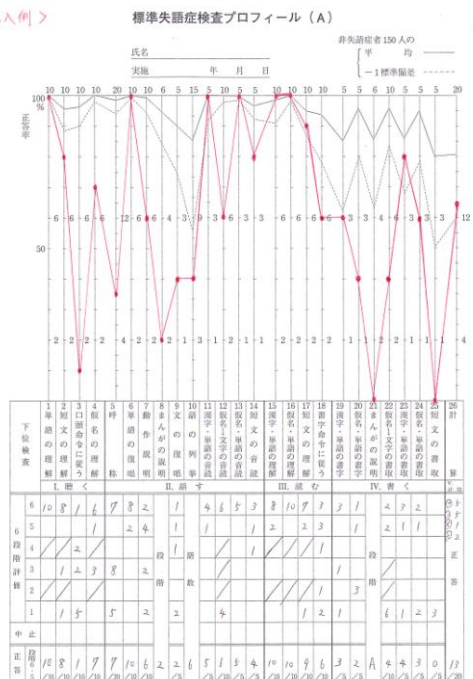
また、課題には易しいものから難しいものがあり、訓練をどのレベルから開始したらよいかを決めるのに参考になります。たとえば「聞く」と「読む」では、単語から短文、さらに複雑な文といった順に配列されています。

各課題で正答できないときには検者がヒントを与え、それを手がかりにして正答できるか否かをみます。ヒントが正答を引き出す手がかりになるかどうか、訓練の内容を決めるにあたって重要な情報となります。

下位検査の多くは6段階で採点され、正答か誤答かの2段階で評価するよりも、反応行動の内容をより細かく知ることができます。

検査の成績は「標準失語症検査プロフィール(A)~(C)」の3種の図によって表すことができます。

<記入例>



標準失語症検査プロフィール表



実用コミュニケーション能力検査(CADL検査)

日常生活習慣を考慮した内容になっており、コミュニケーション障害のある方の総合的なコミュニケーション能力を検査します。

◆対象は？

主に成人のコミュニケーション障害のある方を対象としています。



◆目的は？

- ①言語機能面の評価だけでは把握できにくい言語能力面に対する評価を行う。
- ②検査結果を基に日常生活でのコミュニケーション活動で必要と思われるコミュニケーション手段を訓練し獲得を目指す。

◆内容は？

実際の生活用品を用いて行なわれます。検査内容は、病院を受診する、自動販売機で切符を買う、電話を用いて出前の注文をする、聞いた時刻に時計を合わせる、ラジオの天気予報を聞くなどの日常コミュニケーション場面を想定した課題から成り立っています。相互のやりとりが重視され、情報が伝達できたか(実用性)の有無を採点の基準とします。伝えようとした内容がジェスチャーによって行なわれても伝達可能と判定された場合は「実用的」な反応とみなされ評価されます。例えば、「身体の調子はどうですか？」と尋ねた時に「発話ではなく頭を指差し、首を横に振る」などの反応で表現された場合でもジェスチャーで伝わるので「実用的」と判定されます。

採点は、4～0点で行なわれ、総得点から5段階、①全面援助、②大半援助、③一部援助、④実用的、⑤自立、でコミュニケーションレベルが評定されます。

実用コミュニケーション能力検査
(CADL検査)で使用する物品
です！

